attac 反戦カフェ　　レジュメ　　　　　　　　　　　　　　　2022.9.27　　19 時～　　　担当：砂押

◎構成

・**第一部**、「ロシア軍のウクライナ侵攻」を、★「現史」では、侵攻開始から最近までの経過を追い、
その後、侵攻に至った原因や理由を「過去」に求めてみた。
「過去」は、近いもの★★「前史Ⅱ」（2008 ブカレスト首脳会議から、2021 プーチンの一体性論文まで）と、
さらに遡ってみたもの★★★「前史Ⅰ」（1991 ウクライナ独立から、2004 オレンジ革命まで）とに分けた。

・**第二部**では、さらに詳しく探っていきたいテーマを、3 つに分けて展開した。
◇クリミア（特異な位置を占める）／◇◇プーチン（突っ込みどころ満載）／◇◇◇民族主義（紛争の根源にある）

【第一部】

★「現史」　侵入経路／SWIFT（国債銀行間通信協会）からの締め出し／停戦協議／キーウ攻撃／チェルノブイリ原発占領／
ザボリ―ジャ原発／原子力発電所の分布／チェルノブイリ原発事故の被害／国営テレビで反戦を訴える／マリウポリウ攻撃／
ロシア軍キ―ウ接近／ブチャの虐殺／アゾフスターリ製鉄所／ソ連戦勝旗／ロシア兵士の母の会／志願兵募集広告／
Z の意味／国外避難状況／**ポーランドの難民支援**／**国連難民高等弁務官事務所調査報告**／ロシア海軍の日プーチン演説
※**太字下線**の項目は、後ろのページに記載あり

★★「前史Ⅱ」　ブカレスト首脳会議／ジョージア戦争／**理想の政府アンケート調査**／マイダン革命／ロシア軍クリミア占拠／
ドンバス紛争／ポロシェンコ／**ミンスク合意～その後**／ケルチ海峡事件／ゼレンスキー／**ウクライナ地域別人口・民族**／
ウクライナ国防費／軍事費とアメリカからの支援／徴兵制が復活した国

★★★「前史Ⅰ」　3 巨星墜つ／**ベロヴェージ協定**／**ウクライナのソ連からの独立直前の出来事**／リトアニア「血の日曜日」事件／
ブダペスト覚書／**独立ウクライナの歩み概観**／オレンジ革命／ユシチェンコ／ヤヌコービッチ／チモシェンコ／
オルガリヒ資産規模／ウクライナの小麦／農産物・輸出港／IT 産業関連

【第二部】

◇「クリミア」　クリミアとは／ナイチンゲール／セバストポリ／クリミア概観／クリミア併合前史／クリミア・タタール人／クリミア・タタール人の分布／ウクライナ州市別人口・民族（再使用）／民族別人口ランキング／ウクライナ領土拡大〜住民交換／クリミア併合とは何だったのか？／クリミアの現状／国旗比較

◇◇「プーチン」　今年死亡が報じられたオルガリヒ／チェチェン人亡命者の暗殺／プーチン宮殿／プーチン演説まとめ（2/21・2/24・2021.7.12）／アレクサンドル・ドゥーギン／歴史に憑りつかれたプーチン／イワン・イリイン／プーシキン像〜ウクライナで撤去〜その背景、プーシキンの愛国詩／宗教分布図／正教会における対立／対独戦勝記念日の演説／キューバ危機／ワルシャワ条約機構／NATO の東方拡大／ウラジーミル大公像／キリル総主教／宗教信者比率／原初年代記／キエフ・ルーシ／「反ファシズム」を持ち出してくる理由／「投影」と呼ばれる病的症状／ユーラシア経済連合／ベラルーシ・ロシア連合国家／スターリン礼賛復活・胸像除幕／アゾフ「エリート」と「大衆」の隔絶／ピョートル大帝像〜ウラジーミル大公像〜カラシニコフ像／戦争は「祝祭」／林克明氏の著作／ジェルジェンスキー像復活の動き

◇◇◇「民族主義」　ステパン・バンデラ／反ロシアへ歴史の書き換え／民族主義の扱いに揺れるウクライナ／たいまつ行進〜その批判／アゾフ連隊とは／ホロドモール〜独立運動〜アゾフ大隊／モンゴル・ナチスに侵攻されるウクライナ／「ノヴォロシア人民共和国連邦」構想／ボフダン・フメリニツキー／ウクライナの主要政党／ウクライナ国歌〜ポーランド国歌／ウクライナの民族運動と国際

【第一部】補足

★「現史」

◎ポーランドの難民支援の状況（AAR Japan より　2022.4.2）

- **難民支援というと、通常は当該国の政府や国連機関が主導するというのが一般的。ところが、ポーランドでは全てを市民社会が担っている。具体的には、ボランティアの一般市民であったり、あるいは地元企業が協力するという形で、食料などの物資提供、それから難民の人を自分の家に招き入れて滞在させる民泊といったことが善意で行われていて、これは私は現地で大変感銘を受けました。**
- **民泊という話もあるが、赤の他人である難民の家族を自宅で受け入れる、空いている部屋に住まわせるということを、多くのワルシャワ市民が行っている。政府から多少助成金が出るそうだが、受け入れもそろそろ限界が来ている。**
- **それから、ポーランドにやってきた人々はポーランドにとどまる人だけでなく、国際列車でドイツやオーストリアなど、他の国に向かう人もいる。交通費は無料。EU 域内の各国は自由に移動できる状況なので、いわゆる「難民キャンプ」のような長期間滞在できる施設はない。**

◎ポーランドの状況　　　（今西遼香の記事）

- **ポーランド通信社（PAP）は、ポーランドへの避難民は子供と女性が約半数ずつだと報道（6 月 20 日）**
- **家族・社会政策省は、7 月 19 日時点で 33 万 5,000 人がポーランドで就業したと発表**

◎国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）による、避難民調査結果

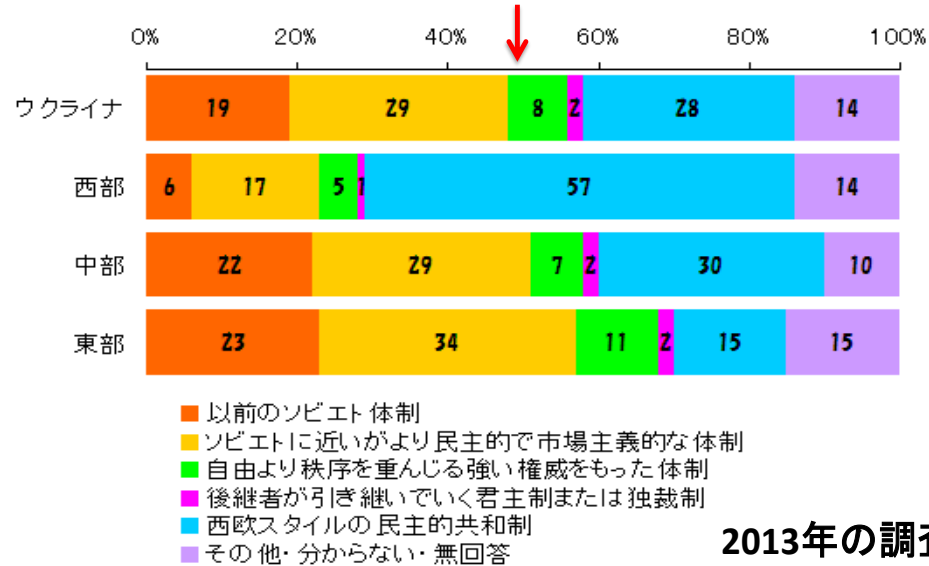
65％の回答者は現在の受け入れ国にとどまる予定、9％は今後 1 カ月以内に他の受け入れ国へ移動予定、16％がウクライナへの帰国を予定

★★「前史Ⅱ」

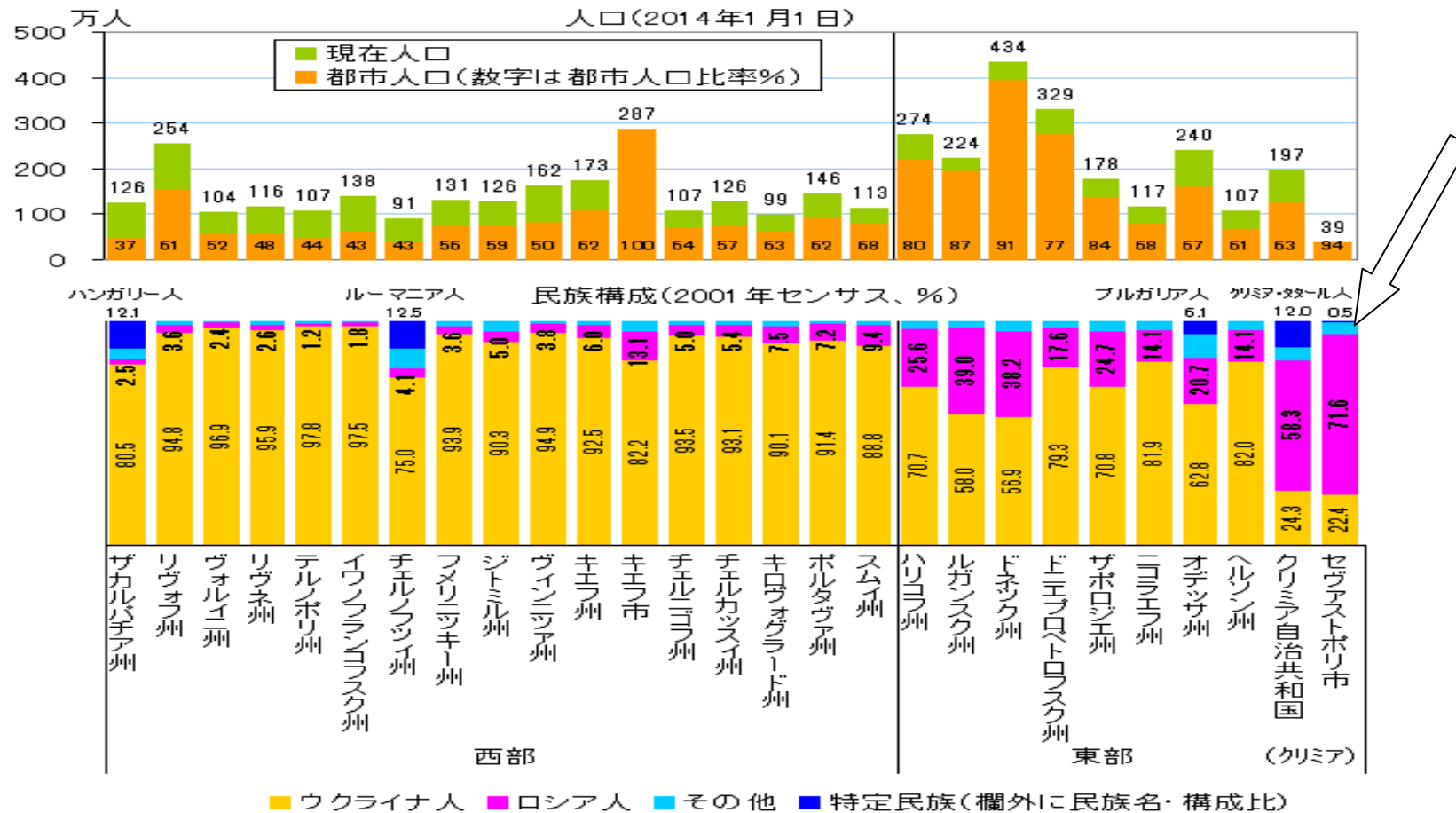
◎ミンスク合意～その後

ミンスク合意は 13 項目から構成されているが、ロシアの意向が強く反映された項目もあり、特に「特別な地位」の付与が争点となっている。
ウクライナ側はロシアによる実効支配につながるなどと警戒し、ロシアはウクライナが訴える項目の修正を拒否してきた。
今年の 2.21 プーチン大統領はドンバス地域の独立を承認し、翌 22 日の会見で、ミンスク合意は長期間履行されず。もはや合意そのものが存在していない、として破棄された

ウクライナ国民にとっての理想の政府

- 以前のソビエト体制
- ソビエトに近いがより民主的で市場主義的な体制
- 自由より秩序を重んじる強い権威をもった体制
- 後継者が引き継いでいく君主制または独裁制
- 西欧スタイルの民主的共和制
- その他・分からない・無回答

2013年の調査

（注）2013年6～7月調査。15歳以上の1000人に対する面接調査による。キエフは中部、
クリミアは東部に含まれる
（資料）Gallup, Democracy Important to Most Ukrainians（March 6, 2014）

西部16州とキーウ　vs.　東部9州とセバストポリ
2412万人（53%）　vs.　2139万人（47%）

★★★「前史Ⅰ」

◎ベロヴェージ協定

主な内容は、①国際法と地政学的現実の対象としてのソビエト連邦の存在は消滅した、②「独立国家共同体（CIS）」を創設する

◎ウクライナのソ連からの独立直前の出来事

・ウクライナ最高会議議長のクラフチュクは、当初ソ連からの独立に慎重な立場をとっていたが、1991年8月のモスクワにおける保守派のクーデター失敗後、独立へ舵を切り、8月23日に独立宣言を行い、「独立を問う住民投票」と「大統領選挙」を12月1日に設定した。

・独立投票において、ウクライナ全土で90%の賛成票が投じられ、特にクリミア・セバストポリを含むすべての地域で過半数を超えていた。

・ウクライナ全土ですでに連邦からの給料・年金の遅配・欠配が常態化しており、ほとんどの住民にとって「ソ連に残る」選択肢は消滅

◎ブダペスト覚書

・ウクライナ・ベラルーシ・カザフスタンが核不拡散条約に加盟したことで、この3か国の安全を、米・英・ロの3か国で保障する

・これをうけて、1994～1996に上記3か国の核兵器は廃棄（実際は、ロシアへ移転）

◎独立ウクライナの歩み概観

・１９９１年末に独立したウクライナは独立国家共同体創設条約に調印したものの、旧ソ連諸国との経済・軍事統合に関心はなく、自国を「ヨーロッパ国」あるいは「中・東欧国」と定義して脱ロ入欧政策を進めた。 この政策は、ウクライナ経済の崩壊により修正を余儀なくされた。

・特に1993年初頭からのロシアのエネルギー価格の国際化は、ウクライナ経済に決定的な打撃を与え、ウクライナ政権は93年半ばには早くもロシアとの経済再統合を模索し始めた。

・この路線転換をめぐりウクライナ政界は二分され、1994年大統領選挙の決選投票ではいわゆる「東西分裂」が観察された。

・ロシアとはあらゆる分野で対立しており、特に黒海艦隊分割、クリミア・セバストポリ市の帰属問題は、武力紛争に発展する危険性を孕んでいた。

・一方、国民統合政策はうまく機能。異なる歴史経験を有する諸地域から形成されているため、政府は「ウクライナ民族」の定義を明確にしなかった。

・ウクライナ国籍は希望する領内旧ソ連市民に無条件で付与され、ウクライナ語化も強制されず、公的空間でのロシア語使用が維持された。

・歴史問題はおおよそソ連時代の解釈を踏襲し、ウクライナ蜂起軍（UPA）の復権はなかった。こうした曖昧さを残したままの国民統合政策は、中央の弱さや特定のイデオロギーに基づく動員の弱さを意味し、結果として、一極支配を防ぎ、民主主義や多元性が機能することにつながった。

【第二部】補足

◇「クリミア」

◎クリミア併合とは何だったのか？

・首都キエフが反政府デモで騒然とする中、2014 年 2 月 8～18 日にウクライナ全土で実施された世論調査結果がある。その中に、「ロシアとの間でどんな国家間関係を望みますか？」という設問があった。その質問に対し、「ロシアと 1 つの国に統合されたい」と答えた回答者の比率は、ウクライナ全体では 12.5%。地域別に見ると、ロシアとの統合を望む声は、やはりクリミアで最も多く、41.0%がそれを望んでいるという数字が出た。非常に多いことは事実だが、筆者はむしろ、この時点ではまだ、対ロシア統合支持が過半数ではなかったという事実を重視したい。

・様相を一変させたのは、やはり首都キエフにおける政変劇。2014 年 2 月 22 日のヤヌコービチ大統領逃亡でクライマックスを迎えた政変は、当初は「ユーロマイダン革命」と呼ばれ、またその後ウクライナ本国では「尊厳革命」と名付けられ美化されている。筆者は、国家を食い物にしたヤヌコービチ大統領への怒りから国民が立ち上がったのは当然だと思うし、彼らの多くが掲げていたヨーロッパ統合への参入という理念も尊重する。が、方法に問題があった。曲がりなりにもヤヌコービチは選挙で選ばれた合法的な大統領であり、ウクライナの特定の地盤（クリミアもその 1 つ）、支持基盤を代表していた。反政府デモを受け、ヤヌコービチ政権側も譲歩の姿勢を示していたし、大統領の任期はあと 1 年しか残ってなかった。交渉で当面の妥協を図り、しかる後、ウクライナの進むべき道は 1 年後の選挙で決着を着けるといったことは、できなかったのか？　実際には、反政府勢力の一部が尖鋭化し、激しいデモでヤヌコービチ政権を追い詰めて、体制を暴力的に打倒することが自己目的になってしまった。このようなやり方は、国民統合にとってマイナスでしかなかった。

• そして問題は、2014 年の政変の過程で、過激かつ暴力的な右派勢力が台頭し、彼らの民族主義的な主張がウクライナの時代精神のようになってしまったことです。一般的に国民国家というものは、シビック（市民的）、エスニック（民族的）という 2 つの類型に大別される。1991 年に、多くのロシア系住民も含め、ウクライナ住民の圧倒的多数がウクライナ独立に賛成したのは、まさに前者が重視された結果だった。つまり、民族や言語にかかわりなく、皆がウクライナという場で権利を享受し幸福を希求できるというコンセンサスがあった。

• ところが、ウクライナ独立後の四半世紀の間に、言語政策や歴史認識などでエスノナショナリズムが強まっていき、ロシア系住民は肩身の狭い思いをするようになった。そして、2014 年 2 月の政変で、エスノナショナリズムが最終的に勝利したような格好になってしまった。クリミアの人々にしてみれば、まったくあずかり知らないところで、ウクライナのありようが勝手に決められてしまい、自分たちが二級市民に転落したような感覚を抱いたことでしょう。クリミアの人々が「ウクライナ」に見切りをつけた瞬間だった。

• 3 月 1 日にプーチン大統領は、ロシア系住民の保護を理由に、ウクライナへのロシア軍投入の承認を上院に求め、上院はこれを全会一致で承認。3 月 6 日にクリミア議会はロシア連邦に加入する方針を決定し、クリミアの国家的帰属を問う住民投票を 3 月 16 日に実施することを決めた

◎クリミアの現状

・クリミアの市民社会は、２０１４年の併合以来、ロシアの法律で規制され、合致しない組織は全て制限され、締め出されている。政権当局は、過激な行動をとる活動家やジャーナリストを定期的に取り調べ、拘留して罰金を科し、逮捕している。狙われているのは、タタール人や親ウクライナ派、あるいは人権保護組織の関係者だ。
・併合に対する不満を表明しただけで、多くの人々が裁判にかけられ、拘束されている。クリミアの映像作家オレグ・センツォフは、テロ行為の名で禁固 20 年の実刑判決を受け、2019 年に捕虜交換の枠組みで釈放さた。
・タタール人共同体も迫害され、マジョリスといわれる伝統的な国民議会は、立場が親ウクライナという理由で、活動を禁止されている。

◇◇「プーチン」

◎プーチン演説まとめ（2/21・2/24・2021.7.12）

ウクライナは単なる隣国ではない。我々自身の歴史、文化、精神的空間の切り離しがたい一部なのだ　　歴史的領土

ウクライナがロシアを攻撃するための NATO の前線基地になる。

親ロシア派占領地域の独立承認

私たちはウクライナの非軍事化と非ナチ化を目指していく。

◎アレクサンドル・ドゥーギン

「新ユーラシア主義」：かつて社会主義の理念で結ばれた旧ソ連の版図を、統制経済とロシア正教の原理で一元化し、西欧でもないアジアでもない、独自の精神共同体と見なす考え

◎プーチンが、ウクライナを批判する時、「反ファシズム」を持ち出してくる理由

ロシアにとっては「反ファシズム」は社会統合を可能にする唯一無二の物語であり、また、自己を欧米と異なるものとして表出するための記号であり、それが選ばれなければならないところにロシアの未来展望の不在が表れている。

◎「投影」と呼ばれるロシアの病的症状

・ウクライナ戦争の開始に至る過程で、政府やマスメディアは、ウクライナ東部のロシア系住民がウクライナ側による「ジェノサイド」の被害　を被っていると繰り返し訴えはじめた。スターリン時代のジェノサイドの加害責任を問われたことに対して、相手に同じ言葉を返すという鏡像的身振りは、戦争でウクライナ人の犠牲者がではじめると、政治家やメディアだけでなく、多くのロシア市民にも見られるようになり、ロシア軍の残虐行為はすべてウクライナ側の仕業だという反転世界が彼らの間に出現した。

・精神分析の用語で「投影」と呼ばれるこうした病的身振りは、「記憶の戦争」の過程で加害者の立場に立たされ、被害国が次々と NATO に加盟し、追いつめられたと感じたことから生じた防衛機制であろう。

◎「エリート」と「大衆」の隔絶

・ロシアのインテリがよく口にする「大衆（толпа)」には、無限の軽侮が込められている。それに対して大衆の方は、エリートを自分たちの富（大地も石油も、何でも自分たちのものだと思っている）に寄生する無為徒食の徒とみなす。

・ソ連時代、ヨシフ・スターリンは、こうした大衆に迎合し、医師や教師など知的職業の給料を労働者より低めに設定した。

・今でもエリートと一般大衆は互いに、「奴らさえいなければロシアはもっといい国になるのに」と本気で思っている。

◇◇◇「民族主義」

◎反ロシアへ歴史の書き換え

・「ユーロ・マイダン革命」後、ウクライナでは非ロシアの一環として歴史の書き直しが進んでいる。

・しかしながら過度のウクライナ民族主義の強調は、国内分裂の火種となるばかりでなく、隣国との係争問題に発展しかねない。ポーランドは、大戦期におけるバンデラの組織の行為を「ポーランド人に対する虐殺」認定し、不快感を露わにしている。

・それまでウクライナ西部でのみ支持されてきた OUN-UPA （ウクライナ民族主義者組織-ウクライナ蜂起軍）の復権も進められた。OUN-UPA は、今日のウクライナ西部において、ナチス、後にソ連の支配に対し武力抵抗運動を行ったことで知られている。

・そのため、ソ連の公式歴史において、OUN-UPA は「テロリスト」あるいは初期にナチスと協力していたことから「ナチスの手先」とのレッテルを貼られてきた。

◎民族主義の扱いに揺れるウクライナ

- ウクライナは複雑な領土編成の歴史を持っており、それぞれの地域が独自の歴史的経験に基づくウクライナ民族観を維持してきた。
- そのため、歴代ウクライナ政権は、国内分裂を招きかねない分野、例えば言語や宗教、そして歴史については国家による介入を避け曖昧な状態にしてきた。
- 独立直後こそウクライナ民族主義（本稿では便宜上、ガリツィア地方のウクライナ観に基づくものを指す）に振れた。初代：クラフチュク
- しかし、第2代大統領クチマ（1994-2004）の時代になると、バランスが図られていく。
  彼の選挙公約「ロシア語の第2国家語化」はあっさり反故にされ、独立後に分派したウクライナ正教キエフ主教座からの国教化要求も無視されてきた。歴史問題についてもソ連時代の歴史解釈がほぼ踏襲されてきた。
- こうした状況は、ユーシチェンコが2005年に大統領に就任すると変化し始める。その一例として、ソ連時代の農業集団化に伴う大飢饉を「ウクライナ民族に対する虐殺」と認定した議会決議を挙げることができる。

◎ホロドモール～独立運動～アゾフ大隊

- 1922 年にはスターリンのソ連に一共和国として組み込まれ、第二次大戦前には農民が飢餓状態になっても穀物を輸出にまわすというスターリン政策によって大飢饉が発生、数百万人が餓死した。
- これも、土地の国有化など共産主義に反対する農民の数を調整するための「人工的な大飢饉」だったとして、米国などは虐殺だとしている。
- こうした状況下で第二次大戦が勃発。ソ連軍を電撃作戦で蹴散らし侵攻してきたナチス・ドイツの部隊は、ウクライナの少なくない人々に「ソ連を駆逐した解放者」として迎えられることになったとされる。
- 実際にはナチスもウクライナの独立を認めず、むしろ戦争で国土が荒廃しただけだった。しかし当時は独立運動家らがナチスのＳＳに入隊するなど、反ソ連感情は消えることがなかった。武力でソ連を撃退したナチスのイメージは「アゾフ大隊」の構成員にも強く影響しているのは間違いない。
- ユダヤ人虐殺の中心となった内務省ＳＳと、前線でソ連軍と戦った武装ＳＳとは別組織だったことに加え、ヴォルフス・アンゲル（狼の罠）の印章は武装ＳＳだけでなく、国防軍の部隊も複数用いていたこともあり、アゾフ大隊が気軽に部隊章などに取り入れた一因とみられている。